人生のどんな時も肯定される社会に

園長　野中　泉

父親懇談会でのことです。「子育てでのこだわり、大事にしたいことはありますか？」というような問いかけに対して、何人かのお父さんたちのこんな答えが気になりました。「普通でいいんです。将来不登校とかひきこもりとかにさえならないでくれたら」。その場にいましたからニュアンス的には「多くは望んでないです。勉強しろと子どもに過大なプレッシャーをかけるつもりはありませんよ」というようなことであって、我が子の将来に何か条件をつけるつもりでないはないことも理解しながら聞いたのですが、それでも、ひとりではなくて複数のお父さんが「ひきこもりとかでさえなければ」という言葉を使ったことが、後になって少し胸にひっかかりました。

不登校や会社勤めがうまくいかなくて 40 代、50 代になっても家にひきこもり続ける子と、そのことで経済的にも精神的にも深刻に追い詰められる年老いた親の姿などがセンセーショナルにテレビ等で伝えられることも珍しくありません。できれば、うちの子だけは将来そんなふうになってほしくないと願うのは当然の親心でしょう。

でも、一方で、不登校やひきこもりは、現代社会では、めずらしいことではないと認識しているのにも関わらず、どこかで「うちの子にかぎっては、それはないだろう」と根拠なく思いこんでしまっているのも、また勝手な親心といえるかもしれません。実は、私も、そんな親のひとりでした。

今年 31 歳になる長男が、コロナ禍の中で仕事を失ったことをきっかけに家にほぼひきこもるようになって、もう 1 年半になろうとしています。当初はただただ布団をひきかぶって寝てばかりいた息子。子どもの頃からずっと優等生で友だちの中でもムードメーカーで明るかった息子が、挫折してふとんを引きかぶり部屋からも出ようともしない姿を見るのはつらくて「私の子育てのどこかが間違っていて、彼をこんなふうに不幸にしてしまったのでは？」と母親である自分を責めずにはいられませんでした。でも、そんな私に兄の顔を見に来た次男がこう言いました。「兄が、不幸か幸せかを母さんが『自分のせい』なんて勝手に決めている間は、兄はずっと幸せにはなれないよ。自分の人生だもん、幸せか不幸せかは自分で決めていいし、もっと言えば、いつつも、ずーっと幸せじゃなきゃいけないなんて、親に決められたら苦しいよね」。

長男は、しばらくしたら布団からは出てきました。また、もうしばらくしたら私のごはんも一緒につくってくれるようになりました。ついでに洗濯や掃除もしておいてくれるようにもなりました。ただ、相変わらず家にはひきこもっています。でも、彼なりに苦悩しながら、彼のペースで生きようともがいているのを感じます。

令和 4 年 4 月。熊取町で「子どもの権利に関する条例」が制定されました。私も、その条例をつくる委員会に参加させてもらっていたのですが、その委員会には、子どもの代表として学生さんも 3 人加わってくれていました。その中のひとりは、自身も不登校の経験がある子だったのですが、その彼女が、たくさんの大人に囲まれた議論の中で、静かに、でもしっかりと述べた意見にとても感銘を受けました。「子どもたちが、たとえ不登校であっても、その時、非行にはしっていたとしても、その存在が肯定され、その権利は守られるという言葉が条例にもりこまれたらと思います」。結局、直接的な文としては彼女の言葉を条例に載せることはできませんでしたが、彼女の発言によって子どもたちの権利は、何かとひきかえではなく、条件つきでもなく、いついかなるときも守られるのだという大事な芯が改めて確認されたのは間違いのないことです。

あたりまえのことですが、人生には、いろんなときがあります。それは、我が子にとっても同じです。「五体満足でいてくれたら」「病気さえしてくれなかったら」、ごくあたり前で当然の願いであると思い込んでいるこのことも、実は奇跡のような偶然でしかないのかもしれません。不登校やひきこもっている子達がたくさんいるように、今まさに病気や障害でたたかっている子達もたくさんいます。その子達のどんな今日もまた、守られ肯定される社会でありますようにと願いながら、新年のごあいさつにしたいと思います。